

開会のあいさつ

菅 山 真 次

東北学院大学経営学部長・経営学部教授

こんにちは。経営学部長の菅山と申します。本日のシンポジウムを主催しております経営研究所の所長を務めさせていただいております。従いまして、最初に私から一言ごあいさつをさせていただきたいと思います。

このシンポジウム、今回で6回目ということになります。普通、大学の附設のシンポジウムと申しますと、どなたかご高名な先生をお招きして、そして我々のほうは実は学生に密かに動員をかけながら聴衆をちょっとサクラ的に集めてというようなことになるんですが、しかしこのシンポジウムは本当に真剣勝負といえますか、今日もごあいさつのことでこの場に立ちますと、ひしひしとそうした非常に密な空気を感じて嬉しい気持ちがいたしております。

今年で6回目、さらに今年は5回の成果を踏まえて、この「東北地方と自動車産業」という本を出版することができまして、そうした成果を踏まえてのシンポジウムということになります。このように、回を重ねるということは、つまり定点観測が私たちのほうでできていて、それが蓄積となっているということだと思います。

アーキテクチャという用語を用いて、自動車産業の分析を非常に深めてこられた藤本隆宏教授、たしか少し前のご著書でしたか、それとも新聞でしたか忘れてしまったんですけども、2000年の初め頃にトヨタの業績が非常に伸びて注目されたときに、新聞記者の人から「なぜ先生、トヨタはこんなに伸びたんでしょう」と聞かれたと。藤本先生に言わせると、「それは君たちが勉強不足なんだよ」。「バブルが崩壊して、日本経済が長期不況にあえぐ中、君たち、全然目を離していただろう。」そんな中でもトヨタは進化しているのであって、そうした変化を私たちは見失ってはいけないのだらうと思います。

このシンポジウムは幸い5年間継続して、しかも一定した視点で分析を行うことができてきたのではないかと自負しております。それはおよそ2つの意味なのではないかと思えます。1つは、非常に視点がぶれていないということ。これは私ども誇りにしているところです。つまり宮城県の中で本格的に自動車産業が根づくためにはどうしたらいいのか、自動車産業という高い壁を持つ産業に参入していくための条件はいかにあるべきか、そうしたような主体の行動を考える上でこの条件、これを分析の焦点にしてきたということ。そしてまた、そうした分析の条件を考える際に非常に幅広いアプローチをとってきたということです。

幅広いアプローチということについても2点指摘することができると思います。今年出版されましたこの本を見ますと、目次を見ていただきたいんですけども、3部構成になっておりまして、第1部は「東北地方の挑戦」ということで、東北地方における現状が詳しく分析されている。

そして第2部では、ベンチマークとして九州・中国地方が分析される。こうしたような広い地域の、私どもの東北だけではない他の、しかも先進的な地域を踏まえた分析、それをもとにしているということ。これが幅広いという意味での第1点目ということになります。今回は特に具先生をお招きして、さらに韓国も踏まえたそうしたスケールの大きな分析が展開されることになるだろうと思います。

第2点目は、この研究が研究者、そして行政の関係者、さらには実務家の方々といったさまざまな異種の方々の報告、発表、研究から成っているということです。こうした異種の分野の方によって、言ってみればケミストリーといいますか、さまざまな化学反応を起こして非常に新しい知見が開けるだろうということを期待しております。

本年もまた、こうした蓄積の上に立って非常に刺激的な議論が行われることを期待しております。

簡単ではございますが、これをもちまして私の開会のお言葉とさせていただきますと思います。どうもありがとうございます。〔拍手〕

○司会（折橋伸哉） 菅山学部長、どうもありがとうございました。

基調講演では、冒頭に私から、出版の経緯と主なメッセージについて少しお話しさせていただきます。その後に、まずこの本に執筆いただきました岩城先生、目代先生に他地域の取り組みについてお話をいただきます。その上で京都産業大学の具先生に韓国の自動車産業の成長と地域産業ということでご講演をいただきます。その後、では東北地域ではどういった取り組みをしているのか、またこの本のメッセージをどう生かすのかという観点で、萱場様、鈴木様からご講演をいただくことにしております。